

チイキスポーツクラブノシツテキカダイサイコウ : フクオカシノスポーツクラブチョウサカラ

吉田, 毅
Institute of Health Science, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/646>

出版情報 : 健康科学. 18, pp.65-75, 1996-03-31. Institute of Health Science, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



地域スポーツクラブの質的課題再考 —福岡市のスポーツクラブ調査から—

吉 田 毅

Reconsideration on the Qualitative Problem of Local Sport Clubs
—From Analysis of the Survey of Sport Clubs in Fukuoka-City—

Takeshi YOSHIDA

Summary

To many Japanese, the local identity and the community consciousness have become weakened due to the rapid urbanization and industrialization. Therefore, local sport clubs have been required to contribute to the reformation of each community. The purpose of this study is to reconsider the qualitative problem of local sport clubs using a survey of sport clubs in Fukuoka-city.

1) We can divide these clubs into three types. The first group includes those that attach importance to athletic meets (=a), second are the recreational clubs (=b), and lastly those that fall between the other two.

2) There are some differences in the activities of each type. Type (a) has tendencies to be fully active, and to perform services for the community. Type (b) has a tendency toward less frequent activity, and not to perform services for the community.

3) In all types, most of the members are satisfied with the activity of each club, and it enriches their lives.

Thus, it is considered that local Japanese sport clubs are diversified. Therefore, the qualitative problem requires amendment. For the present we ought not to require uniformity of all groups in contributing to the reformation of each community, but to recognize the specific activities of all types.

Key words : Local sport clubs, Qualitative problem, Community sport, Diversification of clubs, Life-long sport

(Journal of Health Science, Kyushu University, 18 : 65-75, 1996)

はじめに

今日スポーツは、そのプレイフルな本来的側面や人格形成といった教育的側面もさることながら、身体の開放や健康・体力づくり、生きがいや自己実現、あるいは社会的連帯感の醸成等を保証し得るものとして広く認められるようになってきている。我が国で今日に至るまでに進展したスポーツの大衆化は、こうした多義的ないわば「スポーツの社会的・文化的可能性」¹⁾によるものと考えられる。そして、今日盛んに叫ばれる生涯スポーツの重要性も、かかる意味において再認識される。

ところで、多くの人々において地域で過ごす時間が増大している今日、生涯スポーツが展開される場としては、やはり地域スポーツクラブの果たす役割が大きであろう。しかしながら、「学校運動部の歴史は、そのまま日本の体育・スポーツの歴史」³⁾ (p.68)とも指摘されるように、我が国においてスポーツは、とりわけ学校体育を担い手として発展してきたことは周知の通りである。そのため、地域スポーツクラブは、荒井²⁾によれば明治期にその原型がみられるというものの、活発化の兆しをみせ始めたのは一般に1960年代後半から、つまり社会体育の振興が盛んに叫ばれた東京オリンピック以降にすぎない。

厨⁵⁾によれば、当初はスポーツの大衆化を推進する一方策として、まずは「いかにしてクラブづくりを進めるか」、「いかに多くのクラブを育てるか」といった地域スポーツクラブの量的拡充が課題とされた。それが1980年頃になると、我が国でも所謂豊かな社会を迎え、スポーツの大衆化も着々と進展し、それと同時に地域スポーツクラブに加入する者も著しく増加したのである。「総理府の体力・スポーツに関する世論調査」によると、1972年の地域スポーツクラブへの国民の加入状況は7.4%にすぎないが、1982年には17.6%と約2.5倍も増えている。そして、1988年にも1982年と同様の結果が出ており、この頃は全国に50万余のクラブがあり、成人の1200万人以上がクラブに加入していると推測されるほどにまでなった。

このように、地域スポーツクラブが量的に拡充してきた1980年代の中頃からは、新たに「いかなるクラブを育てるか」という課題が提起されるようになった。つまり、量から質へと焦点が移されたわけである。その頃森川⁴⁾は、地域スポーツクラブの一部に「個人主義的なスポーツ観」や「スポーツ馬鹿」がはびこるようになった状況を懸念し、そこでは「人格と生活の丸ご

とのふれあい」、「かつての地域共同体的な人間的つながり」、それに「地域の連帯をつくりだしていくこと」こそ重要ではないかと指摘している。また厨⁵⁾は、より具体的に、地域スポーツクラブには「スポーツという自己目的的活動、楽しみ活動を媒介にしながら、ゆるやかな紐帯とスポーツ的（文化的）共感を地域社会の中に生み出すこと、各種のスポーツ行事や社会的サービス事業、クラブ間の交流事業などへの参画、連帯、協調などを通じて、『つなぎの感覚』『共生』『助け合いの心』を自然に地域社会の中に堆積していくこと」(pp. 89-90) が期待されると述べている。

ここで注意すべきは、これらの指摘には、単なるスポーツクラブの問題のみならず、産業化に伴う急激な都市化がもたらした「地域における連帯感やコミュニティ意識」の「稀薄化」⁶⁾ (p.28) に対する危惧が底流していることである。もとより地域スポーツ論においては、1970年代に、地域の再編成が叫ばれる機運の中で、スポーツを媒介とした「『人間性の回復』『コミュニティ形成』といった課題と期待」をもった「コミュニティ・スポーツ」⁷⁾ (pp.174-175) の在り方が既に議論されていた。地域スポーツクラブは、いうまでもなく地域スポーツの範疇にあるから、それと同様の課題が地域スポーツクラブ論でも提起されるに至ったと考えられる。地域スポーツクラブに対しても、自らのスポーツ活動だけに留まらず、対外的・表出的に地域に貢献するような、いわばコミュニティ・スポーツクラブとしての在り方が問われるようになったわけである。

さて、こうした課題（以下「質的課題」と呼ぶ）が、地域スポーツクラブとしての1つの模範像（在るべき姿）を示していることは確かであろう。しかしながら、そこではややもすれば地域が優先され、スポーツを行う主体である地域住民個々の現実が看過されてしまう危険性があるようにも思われる。とりわけ今日は、彼らのスポーツへの意味づけは多義的といえよう²⁾。それゆえ、上述のような地域に重点を置いた質的課題はそうした多義性を吸収し得るのか、反面彼らの生涯スポーツの進展を阻害する可能性もあるのではないかといった疑問が生じる。また、クラブの模範像ばかり求めても、果たしてクラブ会員がそれをいかに意識するのか、それが彼らの生の充実につながるのかということとを考慮せねば、地域スポーツクラブの質的充実を語るには不十分といえよう。

そこで本研究は、福岡市のスポーツクラブを対象とした調査を通して、現実の地域スポーツクラブの活動実態と、そこに所属する会員のクラブ活動に関する意

識について把握し、それに基づいてこのような質的課題について再考してみたい。それによって、地域スポーツクラブの今後の課題を再構築していく上でのいくばくかの示唆が得られるものと思われる。ただし、ここでは地域といえども、福岡市の特性を踏まえると比較的都市部の地域スポーツクラブに関する考察ということになる。

福岡市におけるスポーツクラブの活動実態と会員の意識

1. 調査方法

調査の対象は、福岡市内の各体育・スポーツ関係登録団体に加盟している12,114に及ぶスポーツクラブの中から無作為に抽出した400のスポーツクラブの代表者と、各々3名ずつ(計1200名)の会員である。彼らに対して、1993年9月から11月にかけて質問紙調査を行った。質問紙は、福岡市市民局スポーツ振興課の協力を得て、各々のクラブ代表者に代表者に対する質問紙1部と会員に対する質問紙3部を依頼状とともに郵送し、同じく郵送により回収した。その結果、192のクラブから質問紙が返送されてきた。有効票数は、代表者が192(有効回答率:48.0%)、会員が551(有効回答率:45.9%)であった。

調査の内容は、代表者に対してはクラブの基本的特性と活動実態について、会員に対しては個人的特性とクラブ活動に関する意識などである。分析にあたっては、後述のようにクラブの男女構成別及びタイプ別にクロス集計し、サンプルの特性を探っていった。

2. 調査結果と考察

1) クラブの基本的特性

調査の対象となったクラブの主な構造的特性は、表1に示される通りである。

(1) 会員

会員数は「11~20人」が最も多く、「21~30人」がそれに続くが、これらだけで全体の7割以上を占めている。そして、ここ8年間の会員数の推移については、「減った」というクラブもあるが、それよりも「増え

表1. クラブの構造的特性

項目	n	%
会員数		
10人以下	13	6.8
11~20人	83	43.2
21~30人	56	29.2
31~50人	22	11.5
50人以上	18	9.4
会員数の推移		
非常に増えた	24	12.7
やや増えた	68	36.0
変わらなかった	40	21.2
やや減った	38	20.1
非常に減った	19	10.1
会員の男女構成		
男性中心	48	25.0
女性中心	97	50.5
男女両方	47	24.5
会員の年齢構成		
子ども中心(18才未満)	30	15.6
青年層中心(18~29才)	21	10.9
壮年層中心(30~59才)	100	52.1
高齢者中心(60才以上)	5	2.6
異なった年齢層の複合	36	18.8
入会希望者を認めるか		
認める	151	79.9
条件によって認める	32	16.9
認めない	1	0.5
わからない	5	2.6
規約・会則		
成文化されたものがある	70	36.5
成文化されていないがある	56	29.2
ない	66	34.4

た」というクラブが多い。また、約8割のクラブが入会しようとする者を無条件で受け入れると答えている。

次に会員の男女構成については、女性中心のクラブがほぼ半数を占めている。また、年齢構成は、壮年層中心のクラブが半数以上を占めている。表2にこれを男女構成別に示すが、女性中心クラブの7割以上が壮年層中心であるといった点が目立つ。そして、表には示さないが、女性中心クラブの約8割(全体の44.3%)は主婦が中心のクラブとなっている。

表2. クラブの男女構成別にみた会員の年齢構成

	子ども中心	青年層中心	壮年層中心	高齢者中心	複合構成
男性中心	17(35.4)	9(18.8)	13(27.1)	0(0.0)	9(18.8)
女性中心	3(3.1)	4(4.1)	72(74.2)	3(3.1)	15(15.5)
男女両方	10(21.3)	8(17.0)	15(31.9)	2(4.3)	12(25.5)

()内は% n=192 p<0.01

表3. クラブの成立基盤

	n	%
学校OB・OG	9	4.7
職場	11	5.7
業種別	0	0.0
町内会・公民館等の地域	84	43.8
PTA等の校区	13	6.8
スポーツ教室	20	10.4
スポーツ施設	29	15.1
その他	26	13.5

(2) 成立基盤

クラブの成立基盤を表3に示すが、「町内会、公民館等の地域」を中心としたクラブが圧倒的に多い。それに対して、「職場」や「学校OB・OG」型のクラブはわずかである。そうした中で、「スポーツ教室」や「スポーツ施設」を基盤とするクラブが各々1割以上となっている。スポーツ教室からクラブ作りを企図する方法は三鷹方式といわれるが、福岡市でも三鷹市同様に行政側の取り組みが結実してきたと考えられる。

(3) タイプ

クラブのタイプを表4に示す。まず、半数以上が「2」のタイプ（以下「中間型」と呼ぶ）である。そして、「1」のタイプ（以下「楽しみ重視型」と呼ぶ）が「3」と「4」と「5」のタイプ（以下「競技会重視型」と呼ぶ）の合計よりも多い。このように、一概に地域スポーツクラブとはいえ、そのタイプは一様ではない。

(4) 上位団体への加盟

上位団体への加盟率はクラブのタイプによって差がみられる(表5)。競技会重視型のほとんどのクラブが加盟しているのに対して、楽しみ重視型で加盟しているのは3割に充たない。このように、タイプによって非常に対照的な結果となっているが、上位団体に加盟することが競技会に出場するための必要条件とすれば、競技会重視型がそれに加盟しているのは当然でもある。

以上のように、福岡市のスポーツクラブは、まず規模的にみた場合、多くのクラブが小規模のいわばチー

表4. クラブのタイプ

	n	%
1. 競技会をめざさず、仲間とスポーツを楽しむ	56	29.2
2. 競技会もめざすが、仲間とスポーツを楽しむ	110	57.3
3. 市・区・レベルの競技会をめざす	15	7.8
4. 県レベルの競技会をめざす	4	2.1
5. 地域ブロックレベルの競技会をめざす	3	1.6
6. その他	4	2.1

ムのクラブである。そして、規模的に衰退の傾向にあるクラブがあるものの、それ以上に発展の傾向にあるクラブが多い。その要因の1つには、ほとんどのクラブが入会しようとする者に対して開放的であることが考えられる。

また、女性（特に主婦）中心、地域型、楽しみ重視型のクラブが多い傾向にあるが、これらの特徴は、「従来の男性中心や競技中心のクラブから、男女混合型や女性中心型のクラブ、あるいは社交親睦型や同好会型のクラブが著しく増え」、「かつての職場中心から今日では地域中心へと、両者の比率はまったく逆になっている」¹⁹⁾ (p.21) といった、我が国における近年の地域スポーツクラブの一般的な傾向とも合致している。さらに、クラブのタイプが一様でないというのは、冒頭で触れたように今日における人々のスポーツへの意味づけの多様化を示唆するものといえよう。

2) クラブの活動実態

(1) 活動日数

活動日数をタイプ別にみたものを表6に示す。全体的には「週1日」がほぼ半数を占めるが、タイプ別にみると競技会重視型の多くが「週2日以上」であり、他のタイプよりも活動日数が多い。そして、この傾向は公式試合数でも同様であるが、競技会を重視するのであれば、活動日数や試合数が多くなるのは当然でもある。

表5. クラブのタイプ別にみた上位団体への加盟率

	している	していない	不明
楽しみ重視型	15(26.8)	36(64.3)	5(8.9)
中間型	59(53.6)	40(36.4)	11(10.0)
競技会重視型	19(86.4)	2(9.1)	1(4.6)
その他	2(50.0)	2(50.0)	0(0.0)

() 内は% n=192 p<0.01

表 6. クラブのタイプ別にみた活動日数

	週 2 日以上	週 1 日	月 2 ~ 3 日	月 1 日	不定期的	不明
楽しみ重視型	7(12.5)	32(57.1)	12(21.4)	2(3.6)	2(3.6)	1(1.8)
中間型	28(25.5)	53(48.2)	24(21.8)	2(1.8)	2(1.8)	1(0.9)
競技会重視型	15(68.2)	5(22.7)	2(9.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
その他	1(25.0)	3(75.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

() 内は% n=192 p<0.05

表 7. クラブの男女構成別にみた活動の決定方法

	指導者	指導者と 会員の一部	会員の 一部	全員の 話し合い	不明
男性中心	13(27.1)	17(35.4)	5(10.4)	12(25.0)	1(2.1)
女性中心	10(10.3)	20(20.6)	2(2.1)	63(65.0)	2(2.1)
男女両方	5(10.6)	12(25.5)	5(10.6)	24(51.1)	1(2.1)

() 内は% n=192 p<0.01

(2)活動場所・施設

クラブ活動の場所・施設に関しては、全体の47.4%が「十分に確保されている」と答えている。しかし、「不足している」というクラブは51.0%となっている。

(3)活動の決定方法

クラブ活動の決定方法は、男女構成別にみると顕著な差がみられる(表7)。全体的にはほぼ半数が「全員の話し合い」で決めるが、男性中心クラブでは決定に指導者が関与する比率が、他方女性中心クラブでは「全員の話し合い」で決める比率が、各々6割以上を占めている。

(4)会員の交流

スポーツ活動以外の会員の交流の様子を図1に示す。これはタイプによらず、「時々皆で歓談」をする

クラブが圧倒的に多く、反面「交流はない」はわずかである。それゆえ、ほとんどのクラブで、スポーツ活動以外でも会員の交流は行われている傾向にあるといえる。

(5)地域的結びつき

対外的な地域的活動の実施状況について表8に示す。タイプ毎の傾向がはっきりと表れており、明らかに競技会重視型がそうした活動を行っている傾向にある。また、「クラブが地域で認知されていると思うか」という質問に対して、「認知されている」と答えているのは、やはり競技会重視型(95.5%)が楽しみ重視型(35.7%)よりも圧倒的に多い。なお、地域的活動の様子を表9に示す。スポーツ活動とは関係のない「清掃や環境美化などの福祉活動」を行っているクラブも少なくない。

表 8. クラブのタイプ別にみた地域における活動

	している	していない	不明
楽しみ重視型	12(21.4)	41(73.2)	3(5.4)
中間型	52(47.2)	55(50.0)	3(2.7)
競技会重視型	14(63.6)	5(22.7)	3(13.6)
その他	1(25.0)	3(75.0)	0(0.0)

() 内は% n=192 p<0.01

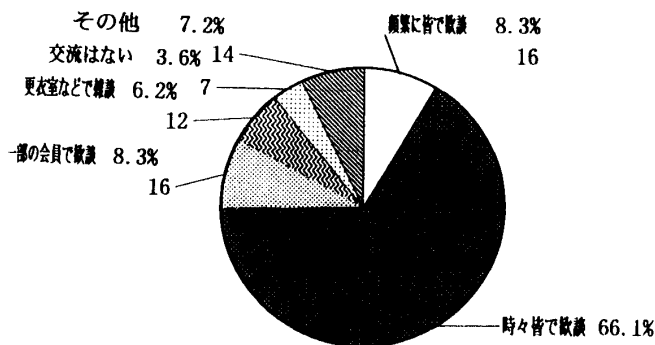


図 1. スポーツ活動以外の会員の交流

表9. 地域における活動の内容

	n	%
スポーツ教室の実施・手伝い	12	15.2
大会や体育祭の実施手伝い	42	53.2
映画会・講習会・バザー	4	5.1
清掃や環境美化などの福祉活動	12	15.2
老人や障害者の世話などの福祉活動	1	1.3
その他	7	8.9

n=78

福岡市のスポーツクラブの活動実態は以上の通りであるが、明らかにクラブのタイプによって活動の日数や内容が異なっている。つまり、楽しみ重視型に比べて競技会重視型の方が頻繁に活動しており、また対外的・表出的に地域に貢献している様子が伺われる。この意味で、競技会重視型の多くは、ただ単にスポーツを行う集団というよりも、地域に根ざす・地域のための集団になっているといっても過言ではないであろう。ただし、活動の決定方法は、タイプではなく男女構成別によって異なっており、男性中心クラブは指導者主導の傾向に、女性中心クラブは民主的な傾向にあるといえよう。これらから、地域スポーツクラブの活動実態は一様でないことが明らかである。

しかしながら、会員間の交流はタイプによらず活発な様子であるから、楽しみ重視型でも、クラブがスポーツ活動だけに留まらない地域的交流の場になっているといえよう。また、施設についてもタイプによらず不足しているクラブが半数以上あるが、これは各クラブで個別的に解決できる問題ではない。この問題を解決するには、少なくともクラブ間相互の連携・協力が必要である。その際には、冒頭で触れた個人主義的なスポーツ観やスポーツ馬鹿はやはり障害となろう。

3) 会員のクラブ活動に関する意識

会員の個人的特性については表10に示される通りである。性別や年齢はもとより、所属するクラブのタイプ等が、前述のようなクラブの基本的特性に対応する

表10. 会員の個人的特性

項目	n	%
性別		
男性	173	31.4
女性	378	68.6
年齢		
10才代	38	6.9
20才代	85	15.5
30才代	138	25.1
40才代	171	31.1
50才代	75	13.7
60才以上	42	7.7
職業		
管理職	23	4.2
農・林・漁業	3	0.5
商工業・サービス業	46	8.3
自由業	13	2.4
専門・技術職	108	19.6
技能・労務職	16	2.9
主婦（パートあり）	122	22.1
主婦（パートなし）	145	26.3
無職	11	2.0
小・中学生	32	5.9
高校・大学生	18	3.2
その他	14	2.5
市内居住年数		
1年未満	7	1.3
1～5年	73	13.4
5～10年	99	18.2
10～20年	130	23.9
20年以上	236	43.3
クラブ所属年数		
1年未満	49	8.9
1～2年	118	21.4
3～5年	172	31.2
6～9年	102	18.5
10年以上	110	20.0

ものであることはいうまでもない。

クラブに加入した目的をタイプ別にみると、やはり「勝利・競技力向上」や「心身鍛練・自己実現」の比率は、競技会重視型の方が他のタイプよりも高い傾向にある(表11)。しかしながら、競技会重視型だけでみ

表11. 会員のタイプ別にみたクラブ加入の目的

	勝利・競技力向上	気晴らしや楽しみ	仲間との交流	健康の維持・増進	心身鍛練自己実現	美容	その他
楽しみ重視型	4(2.5)	54(34.2)	28(17.7)	58(36.7)	10(6.3)	1(0.6)	3(1.9)
中間型	21(6.7)	97(31.1)	59(18.9)	97(31.1)	24(7.7)	1(0.3)	13(4.2)
競技会重視型	12(17.1)	16(22.9)	13(18.6)	16(22.9)	10(14.3)	0(0.0)	3(4.3)
その他	0(0.0)	0(0.0)	5(45.5)	5(45.5)	1(9.1)	0(0.0)	0(0.0)

()内は% n=551 p<0.05

表12. 会員のタイプ別にみたクラブの雰囲気

	いつも厳しい	練習中は厳しい	いつも和やか	その他
楽しみ重視型	1 (0.6)	25(15.8)	130(82.3)	2(1.3)
中間型	2(0.6)	103(33.0)	205(65.7)	2(0.6)
競技会重視型	1(1.4)	41(58.6)	28(40.0)	0(0.0)
その他	0(0.0)	5(45.5)	5(45.5)	1(0.9)

() 内は% n=551 p<0.01

表13. 会員のタイプ別にみたクラブによる拘束感

	非常に感じる	やや感じる	あまり感じない	全く感じない	不明
楽しみ重視型	3(1.9)	3(1.9)	56(35.4)	95(60.1)	1(0.6)
中間型	7(2.2)	38(12.2)	160(51.3)	107(34.3)	0(0.0)
競技会重視型	0(0.0)	20(28.6)	31(44.3)	16(22.9)	3(4.3)
その他	0(0.0)	2(18.2)	4(36.4)	5(45.5)	0(0.0)

() 内は% n=551 p<0.01

れば、それらよりもむしろ「気晴らしや楽しみ」や「健康の維持・増進」といった目的で加入した者の方が多い。ここで注意すべきは、質的課題に関連するであろう「仲間との交流」が目的であった者は各タイプとも2割弱に留まることである。

さて、クラブ活動の実態については前述の通りだが、次にそれを会員がいかんか感じているのかをみていきたい。クラブの雰囲気をタイプ別にみたものが表12、クラブの決まりや人間関係による拘束感をタイプ別にみたものが表13である。双方とも競技会重視型会員において、「練習中は厳しい」ないしは拘束感を「感じる」といった傾向がみられる。

しかしながら、競技力向上を志向すればするほど気ままな活動ではすまなくなり、練習が厳しくなったり、拘束感が生じたりするのは当然でもある。それゆえ肝心なのは、彼らがそうした活動をいかんか評価しているのかといったことであろう。

これに関して、まず「クラブに参加するようになっ

てから生活の充実感に変化はあったか」という質問に対して、ほとんどの会員が「充実するようになった」と答えている(表14)。そして、ほとんどの会員が現在のクラブ活動に「満足」している(図2)。このように、会員はクラブ活動に対して非常に好ましい評価をしている。それゆえ、全体の74.6%が生活の中でクラブ活動が「重要」と考えており、「今後現在所属しているクラブでの活動を続けたいか」という質問に対して、70.6%は「続けたい」、27.4%は「もう少し続けたい」と答えている。

表14. クラブ参加による生活の充実感の変化

	n	%
かなり充実するようになった	227	41.2
やや充実するようになった	232	42.1
変わらない	86	15.6
その他	6	1.1

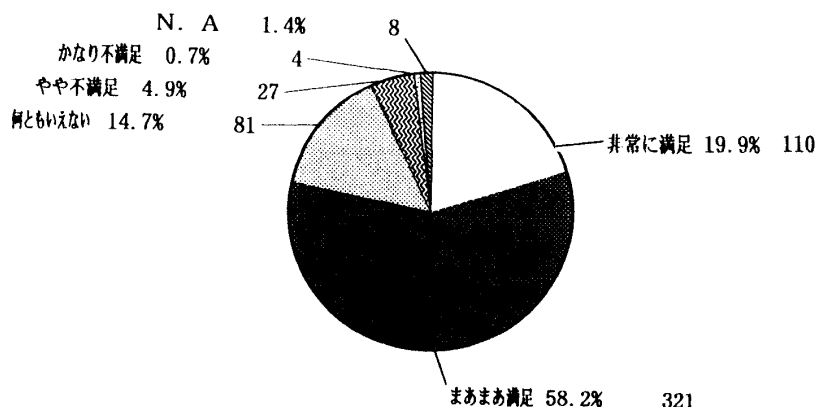


図2. 会員のクラブ活動に対する満足度

さらに、クラブ参加による会員の日常生活への効果を見ると、「近隣の人達との交際が広がった」が65.0%、「町内会や自治会の会合への参加が多くなった」が39.4%となっている。それに、「地域の清掃・廃品回収などの奉仕活動への参加が多くなった」が24.6%であるが、これは競技会重視型会員が全体的傾向よりも約7ポイント高くなっている。

以上のように、福岡市のスポーツクラブは、クラブのタイプによって活動内容に幾つか違いがあり、活動の決定方法は男女構成によって違いがある。また、そうしたクラブ活動に対する会員の感じ方（雰囲気や拘束感）はタイプによって差があるものの、彼らのクラブ活動に対する評価は全体的に非常に好ましいことが理解される。

地域スポーツクラブの質的課題再考

次に、前述のような調査結果を踏まえ、地域スポーツクラブの質的課題について考えてみたい。

まず、調査対象のスポーツクラブにおいて、競技会重視型は活動日数が多いだけでなく、対外的・表出的に地域に貢献する活動を行っているクラブが多い傾向にあった。他方、中間型から楽しみ重視型になるにつれて、活動日数が少なくなるばかりか、そうした活動を行っているクラブも少なくなる傾向にあった。

したがって、まず競技会重視型の多くは、表出的な意味では質的課題をクリアしていることになる。ただし、冒頭で述べたように、真にクラブの質的充実を語るには、活動内容とともにそれを会員がいかに意識しているのかを考慮することが重要と思われるが、ほとんどの競技会重視型会員はそうしたクラブ活動で満足感や充実感を得ていた。そのため、ここで初めて競技会重視型の多くは質的に充実しているといえると思われる。

他方、中間型から楽しみ重視型になるにつれて、表出的には質的課題をクリアできていないことになる。したがって、質的課題を規準とすれば、これらのクラブは地域スポーツクラブとして質的に問題があることにもなる。しかしながら、地域スポーツクラブの質を評価する際には、そうした一義的な課題（規準）を設けること自体に問題があると思われる。とりわけ楽しみ重視型にとって、質的課題は無理があるといえよう。

村越¹⁰⁾は、個々においてスポーツ活動を「楽しみの場」と「人づきあいの場」と意味づけるかどうか、ただ単にスポーツを実施した時間よりも心理的健康を規定するといったことを指摘している。これは、とりわけ

楽しみ重視型会員のクラブ活動への意味づけを示唆しているように思われる。というのも、前述のように彼らにとってクラブは、現にそのような場になっており、そこで彼らは満足感や充実感を得ていたからである。

そのため、彼らに対して、対外的・表出的な地域への貢献を求めることの方に無理があろう。それは、彼らのクラブ活動への意味づけからかけ離れたもので、彼らにとって1つの外的な規準ともなりかねない。そうした規準は、彼らにとって苦痛となり、彼らの心理的健康を害したり、ひいてはクラブからのドロップアウトを惹起する可能性もある。さらに、そもそもそういった課題は、楽しみ重視型のようなクラブの存続に対して圧力となる危険性もあろう。

ところで、楽しみ重視型も、スポーツ活動以外でも会員（地域住民）の交流は活発な様子であった。そして、そうしたクラブ活動で会員は満足感や充実感を得ていたし、クラブ活動の効果は会員の日常生活（交際の広がり等）にも及んでいた。それゆえ、楽しみ重視型も、対外的・表出的ではないものの細やかにコミュニティ形成に貢献しているといえよう。この意味で、地域スポーツクラブとしての一定の価値が認められ、それなりに質的に充実していると思われる。

ここで重要なのは、タイプ毎の活動内容の違いが、各々の会員のクラブ活動への意味づけによるところが大きいと考えられることである。ただ単に各々の会員のクラブ活動にあてることのできる時間（労力）だけに規定されているのではないであろう。つまり、今日人々のスポーツへの意味づけは多様化しているが、むしろ地域スポーツクラブにおいてもこのことが当てはまっているといえよう。これは、クラブのタイプや会員のクラブへの加入目的が一義的でないことはもちろん、クラブの活動内容がタイプによって異なっているにも関わらず、会員のクラブ活動への評価が全体的に非常に好ましかったことから示唆される。

このようにみえてくると、今日地域スポーツクラブは「少衆」化しているとも考えられる。少衆とは、消費社会論で提示されたマーケティング関連の用語である。つまり、我が国では産業化以降、特に1980年代になると、商品の「良い悪い」といった「理性」を規準とする大衆消費に代わって、「好き嫌い」や「面白い面白くない」といった「感性」を規準とする新たな消費が台頭してきた。「画一的な大衆消費から、感性を共有する仲間たる『少衆』が個性的な消費を繰り広げる多様な消費の時代へと転化」し、それが新たな消費社会を特徴づける存在になったというのである¹¹⁾。

もとより消費とは、本質的に「生産」との対概念であったわけではなく¹⁷⁾、それには「生産活動に対して機能的ではない部分」、つまり「それ自身のうちに目的をもつ」という「非生産的消費と呼ばれる行為様式」もある²¹⁾。したがって、消費を「ものの消耗と再生をその仮りの目的としながら、じつは、充実した時間の消耗こそを真の目的とする行動」とする山崎²²⁾の定義は正鵠を射ているといえよう。

消費をこのように捉えた時、スポーツ活動も一種の消費と見做すことが可能と思われる^(#1)。この意味で、産業化以降の消費の少衆化と地域スポーツクラブの意味的多様化とは軌を一にしているといえよう。地域スポーツクラブも、各々のタイプなりに類似した好みや感性を共有する仲間（少衆）が集う場になっていると考えられる。それゆえ質的課題は、確かに地域スポーツクラブの1つの模範像を示してはいるが、多様なクラブ活動への意味づけを吸収するには無理があり、少衆化する地域スポーツクラブの現実から遠ざかっていく危険性を孕んでいることが理解されよう。しかも、一元的な課題（規準）というの、ある側面を発展させるにはよいが、それに適わないところで自己喪失や不安等の病弊を惹起する恐れがあることにも留意すべきと思われる^(#2)。

表現を換えれば、質的課題は、基本的にいわば「公」的な「sollenのレベル」にあり、「私」的な「seinのレベル」にはないといえよう。しかし、seinのレベル、つまり「地域住民が自らのスポーツ活動にこめた地域的意味は、歴然と存在することはいうまでもない」⁹⁾(p. 67)。前述のように、ほとんどの会員のクラブに加入した目的は私的なレベルにあり、それと質（公）的課題との距離はやはり大きい。もちろん地域スポーツクラブの公的価値は重要だが、私的レベルを尊重しなければ私と公との距離はいつまでたっても埋まらないであろう。

ただし、ここでは質的課題が無能であるといっているのではもちろんない。現に、競技会重視型は、自らのスポーツ活動だけに留まらず、対外的・表出的に地域に貢献していたわけであり、そこに所属する会員はそうしたクラブ活動で満足感を得ていたのである。それゆえ、それなりの意味づけの下、クラブ活動にある程度の時間（労力）をあてることのできる会員が集ったクラブにはそうした課題を提示し、大いに地域への貢献も含めたクラブ活動の活発化を促進すればよいと思われる^(#3)。

おわりに

本研究では、福岡市のスポーツクラブの調査に基づき、地域スポーツクラブの質的課題について再考してみた。しかし、一概に地域とはいえ、各々の地域が抱えている問題は多種多様であるから、地域スポーツクラブの質的充実の様相というのも地域によって違いが生じてこよう。そのため、これについては様々な視角から検討していくことが今後も重要である。ここで、地域スポーツクラブの課題を再構築する余裕はないが、これまでに得られた知見から、その基本的視点は次のように考えられる。

松村⁷⁾は、我が国で「戦後の学校制度の外で展開した体育・スポーツの考え方」が「社会体育論→コミュニティ・スポーツ論（国民スポーツ論）→生涯スポーツ論」へ移行してきたことを指摘する。端的にいえば、それは「体育からスポーツ」ないしは「社会の健康問題から個人の健康問題」（pp.167-168）へのシフトである^(#4)。それに対して、地域スポーツクラブ論は、質的課題にもみられるように未だに「体育」や「社会」に重点を置いたコミュニティ論議に留まっている感がある。しかし、前述のように、やはりそこでも会員個々の現実（クラブへの意味づけ等）を尊重することが不可欠といえよう。というのも、クラブとしていくら地域に貢献したとしても、それが会員個々の満足感や充実感につながっていかなければ、自主的・自発的であるはずのクラブ活動が、自己喪失等個人の不健康をもたらしてしまう恐れもあるからである。

そして、そうしたクラブ活動による会員の満足感や充実感は、彼らのクラブに対する意味づけと実際の活動との連関（一致）から生じると考えられるが¹⁰⁾、今日そうした意味づけは多様化しているから、対外的な地域への貢献をあらゆる地域スポーツクラブに求めるのは無理がある（さしずめ楽しみ重視型に多くの活動内容は期待できない）。中島ほか¹³⁾も指摘するように、地域スポーツクラブとはいえ、そこではまずもってスポーツ活動を尊重し、その上で可能なクラブは対外的・表出的な地域への貢献も果たせばよいと思われる。要するに、肝心なのはそれぞれなりの活動を保証していくことといえよう。それにより、地域スポーツクラブは大いに生涯スポーツの進展にも寄与し得ることになる。

なお、地域スポーツクラブではスポーツ活動だけでも1つの地域的交流と考えられるし、それにより会員が満足感や充実感を得ているならば、地域スポーツ

クラブの活動はそれだけでもよいと思われる。ただし、もちろん個人主義的なスポーツ観がはびこる（他のクラブを尊重しない）クラブ、また個別的に存在するクラブの在り方を容認すべきというのではない。「地域とは別次元に外在化して営まれるところの、一部の同好者集団による」¹⁹⁾(p.24) クラブは、単なる地域におけるスポーツクラブにすぎず、決して地域スポーツクラブないしはコミュニティ・スポーツクラブと呼ぶには値しないであろう。それゆえ、地域スポーツクラブというからには、何らかの形で地域性を取り込むことはやはり重要であろう。

しかしながら、既に明らかのように、そうした地域性を一義的にクラブの活動形態に求めると無理が生じる。それゆえ、むしろ存在（組織）形態、言い換えればクラブ間のつながりに求めればよいと思われる。つまり、クラブ活動への多様な意味づけを吸収し得る形態、また暉峻²⁰⁾が指摘するように、歴史的に繁栄してきたのが「共存の社会原則を尊重してきた社会」であることを踏まえ、やはり多様なクラブが共存・共生し得る形態をとり、それによってある種の地域的連帯を図ることが有効と考えられる。

この意味で、楽しみ重視型をも包含した柔軟なクラブ連合的組織（決して競技会重視型中心といったヒエラルキーの存在しない）を地域的に発足すること、あるいは文部省が今年度から取り組み始めた、「多様なスポーツニーズに応じたスポーツ活動の機会の拡充」等を狙いとした「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」¹⁵⁾は有意義と思われる。それによつては、前述のような施設の問題も解決される可能性もある。また、欧米型の総合的な地域スポーツクラブを築こうとするJリーグの構想⁴¹⁾は、確かに多くの問題を抱えており、困難が予想されるものの画期的といえよう。

(注1) もちろん、ここで対象とするスポーツ活動は、基本的に義務的・職業的なものではなく、自発的・余暇（趣味）的なものであることはいままでもない。

(注2) 山崎²³⁾は、アメリカの近代的繁栄は、業績主義的な人間の一元的評価規準によつてもたらされたが、その反面そうした一元的規準（むしろ質的課題に関する規準とは性格を異にするが）によつて小集団の破壊、自己喪失、不安等の病弊がアメリカ社会に惹起されたことを指摘する。

(注3) しかし、この課題を語る際には、スポーツが親交的コミュニティを形成するための主要な手段と見做す仮説への疑義¹⁴⁾があることはもちろん、スポーツによるコミュニティ形成の可能性と限界が未だに明らかでないことに留意すべきである⁷¹⁾。

(注4) 松村⁷⁾も指摘するように、生涯スポーツ論は、医療費の節減や福祉社会の建設等のスポーツによる社会的機能にも着目してはいる。しかし、個人の側に重点を置いていることは確かであろう(pp.167-168)。

文 献

- 1) 荒井貞光：スポーツ集団の歴史的・社会的性格。体育社会学研究，3：37-60，1974。
- 2) 上杉正幸：スポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析。体育・スポーツ社会学研究，9：1-21，1990。
- 3) 川辺 光：学校運動部集団の日本の特質。体育社会学研究，3：61-82，1974。
- 4) 梶 正勝：Jリーグのスポーツ革命。ほんの木，1994。pp.119-215。
- 5) 厨 義弘，佐藤靖典，井神秀展：「共同性を拓き，豊かな地域活動を育てるスポーツクラブ」。厨 義弘，大谷善博（編），地域スポーツの創造と展開。大修館，1990。pp.78-91。
- 6) 松村和則：「地域」におけるスポーツ活動分析の一試論。体育社会学研究，7：65-98，1978。
- 7) 松村和則：地域づくりとスポーツの社会学。道と書院，1993。
- 8) 森川貞夫：「コミュニティ・スポーツ」論の問題点。体育社会学研究，4：21-54，1975。
- 9) 森川貞夫：地域に生きるスポーツクラブ。国土社，1987。pp.17-29。
- 10) 村越 真：スポーツ活動の意味づけが、心理的健康に及ぼす影響。体育学研究，39(1)：1-11，1994。
- 11) 中村達也：豊かさの孤独。岩波書店，1992。pp.19-39。
- 12) 中山正吉：地域のスポーツ研究の軌跡と課題。体育・スポーツ社会学研究，10：35-50，1991。
- 13) 中島豊雄，川西正志，鈴木文明：地域社会におけるスポーツクラブの社会的機能。名古屋大学総合保健体育科学，6(1)：143-155，1983。
- 14) 園部雅久：「コミュニティの現実性と可能性」。鈴木 広，倉沢 進（編），都市社会学。アカデミア出版会，1984。pp.315-342。

- 15) 生涯スポーツ課：平成7年度総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業について, スポーツと健康, 27(10) : 29-31, 1995.
- 16) 玉木正之：Jリーグからの風. 集英社文庫, 1993.
- 17) 田中義久：「消費」. 見田宗介, 栗原 彬, 田中義久(編), 社会学事典. 弘文堂, 1988. pp.461-462.
- 18) 多々納秀雄：スポーツの社会的・文化的可能性とその課題. 学校体育, 48(1) : 14-17, 1995.
- 19) 多々納秀雄：「現代の社会心理とスポーツ」. 徳永幹雄, 庭木守彦, 佐々本稔, 山本勝昭, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 現代スポーツの社会心理. 遊戯社, 1985. pp.11-24.
- 20) 暉峻淑子：豊かさとは何か. 岩波新書, 1989. p. 202.
- 21) 内田隆三：「消費」. 森岡清美, 塩原 勉, 本間康平(編), 新社会学辞典. 有斐閣, 1993. p.741.
- 22) 山崎正和：柔らかい個人主義の誕生. 中公文庫, 1987. p.167.
- 23) 山崎正和：近代の擁護. P H P 研究所, 1994. pp. 179-208.